

江戸幕府の経済政策

貨幣改鑄が幕府の崩壊を招いた

貨幣経済が発達していなかったとはいえ、

全国には400万石にも及ぶ直轄地があり、金山、銀山の資源を独占し、

長崎朱印貿易等で莫大な富を得ていた

キリスト教布教を恐れ、朱印船貿易から撤退

第3代将軍・徳川家光のころには、金山からとれる金が枯渇し、

また、江戸をほぼ全焼させた明暦の大火（1654年）が起き、財政圧迫の追い打ちをかけられた、

復興事業により幕府資産は600万両から100万両に激減した

直轄領からのコメの税収を期待したが、全国規模の新田開発を進め、豊作によりコメの価格が下がり、期待した税収収入にはならなかった。

経費は増大、年々収入は減衰、財政は逼迫した。

荻原茂秀、1695年、元禄8年、純度86%の慶長小判を純度57%の元禄小判に作り替える2/3の改鑄を断行、および交換レートを1対1とした。

よって、貨幣流通量は1・5倍となった

増えた分は幕府の金蔵に入り、幕府の財政は瞬く間に改善し、

500万両の資産を得ることとなった。

通貨発行益とデフレからの脱却によって、幕府は財政破綻の危機から脱することができた。

大量の貨幣を市場に流通させると急激なインフレを招くが、重秀の貨幣改鑄はそうはならず、商品価格は乱高下せず、庶民の生活もさして影響を与えず、むしろ経済を安定させた。

重秀は、幕府に信用がある限り、幕府の発行する通貨も保証されることを見抜いていた。

そして次に、復調した幕府財政にブレーキをかけた人物があらわれた

第6代将軍・家宣、第7代将軍家継の側近となった新井白石です。

彼は、元禄小判の金含有量を慶長小判の水準に戻す、逆改鑄を行う。

結果、市場に流通する貨幣が減り、経済はデフレに逆戻り、やがて全国の経済活動は停滞し、幕府は、瞬く間に財政危機にさらされました。

正徳の治と称される文治政治の新井白石ですが、所詮儒学者、残念ながらの経済音痴だった

これ以降、幕府はコメ本位の経済政策にこだわり続け、ついに財政再建はならなかった。

不評で取りやめた「上米の制」

第8代将軍・吉宗は享保の改革に着手するが、財政再建は難題でした

彼は、財政政策の根本的原因が緊縮財政にあると見抜けず、質素儉約の方向に進んでしまった。

儉約令を出し、幕府諸藩に支出を抑えようとした

しかし、これだけでは財政は好転しなかった

この儉約令は、武士階級ばかりでなく、一般庶民にも儉約を強制した。

消費者全体が購買意欲を失うとモノの流通が停滞し、それに伴って、経済までも回らなくなってしまう

幕府や諸藩が支出を抑えれば予算も減らしますから、公共事業も抑えられ、モノが消費されず、経済が悪化すれば消費者の賃金にも影響するのは道理です

それがさらに、消費の減退へとつながって物価が下落するという悪循環に陥り、こうして今でいうデフレスパイラルが江戸を襲った

幕府の財政も深刻度を増し、吉宗は策を講じます

それが1722年 享保7年に制定した「上米の制」。

諸藩に1万石につき100石の米を幕府に出せば参勤交代を半年にするという。

幕府の財政を「コメ」によって立て直そうとした

しかし、諸藩も財政は厳しく、当時江戸の町の最大の消費者といえは滞在する諸大名や家臣、半年滞在では、結果的に江戸の経済は上向かず、むしろ悪化した

また、「上米の制」によって幕府に収めるべき米が全国から江戸へ集まり、幕府はすべて江戸で換金した。

このため、コメの価格は下落。

この現象はコメを俸禄として現物支給される旗本、御家人にとっては大打撃であった。

代々の俸禄は上がらず、コメの価格は下がるばかり、収入源は下がるばかり、生活は窮乏していき、不満が高ぶりつづけた

結局「上米の制」は9年で廃止になり、

吉宗は、経済立て直しに金融緩和が必要と気がつくのですが、大岡忠助の進言を受けて貨幣改鑄へ踏み切った

すると、瞬く間に景気は上向き、幕府財政も好転の兆しを見せ始めた

実施当初は急激なインフレに見舞われたが、次第に物価は安定していった。

当初、コメ將軍と言われたようにコメに執着したのが失敗だったといえる

幕府の威信を失墜させた「棄損令」

江戸時代、飢饉が頻発し、多くの農民が田畑を放棄、逃亡、農業生産は何度も危機に瀕した。

にもかかわらず、幕府はコメ収入に頼り切り、結局、財政再建もままならず、江戸時代は後期を迎えた

経済的に苦しんでいたのは幕臣である旗本や御家人も同じ、コメが取れなければ救貧になり、豊作になれば価格が下落して買いたたかれてしまう。

コメ本位経済は限界に達していた。彼らはもはや幕府からの俸禄では生活できなくなっていった

その多くは借金に借金を重ね、売れるものは全部売り、内職で生計を立てている。

この惨状を見かねた幕府は、ようやく幕臣の救済策を打ち出します。

それが 1789 年寛政元年に出された「棄捐令」という法令でした。

5 年以前の、借金はすべて棒引きとし、それ以後のものは利子を 3 分の 1 まで下げ、かつ、永年腑とした。永年腑とは返済期限を定めないという意味

幕臣の借金踏み倒しを許すものであった

幕臣にはよいが、金を貸した札差しには不満が募り、以後は貸し渋りに走った

幕臣たちは借金がなくなった代わりに金融面での信用も失ってしまった

幕臣たちはさらに窮乏し、家財を処分し、御家人株（家格）を売り払うものまで現れた

棄捐令は、ほんの数年で撤回され

失われた幕府の信頼は小さくなかった

水野忠邦の渾身の政策「上知令」

天保期になると、天保の飢饉に見舞われコメをはじめとする物価が高騰して江戸でも餓死するものが出る惨状

それに加え第 11 代将軍家斉は、金を湯水のように使い、豪奢な暮らし、次第に怨嗟の声が響き渡った

幕府は有効な手段を打つ手もなく、無策を続けました

幕府の対応に激怒した大塩平八郎が大阪で反乱（1837 年）を起こし、施錠の反乱を極めた

50 年ほど前の寛政の改革において質を落とした文政小判を大量に改鑄し、550 万両の調達をした松平定信、合わせて幕府予算の削減も功を奏していたが、定信は政治の指導権争いの中で失脚し、幕府はまたしても貴重な経済通を失ってしまった

幕府財政は再び火の車に、海防のために蝦夷地を開発したり、家斉の贅沢三昧に拍車がかかったり、金が出ていくことばかりになった

そんな時期に政治の舞台に登場したのが老中首座水野忠邦でした

ところがこの忠邦も輪をかけた経済音痴、

極端な儉約令をはっし

- 1, 目安箱、2, 5公5民、3, 新田開発、4, 公事方御定書、5, 儉約令、6, 江戸町奉行、7, 定免法、8, 上米の制

等を反面教師とすることもせず権力にものを言わせて強行した

華美な衣装の禁止、芝居小屋や寄席も廃止、歌舞伎場の移設、出版の禁止等、庶民の楽しみすら奪ってしまった。

金銀、贅沢の禁止、監視なども行う

結果、大名、庶民の消費は喚起されなくなり、江戸の経済はすっかり停滞してしまった。

株仲間の解散

自主的に規制を行うことで商品価格や供給、物流の安定を目指す → 株仲間が結託して価格を釣り上げているから物価が高騰する、と

投機的な売買を仕掛ける「仕手」が原因することもある、

基本的には需要と供給のバランスによって変動するもの。

忠邦はこうした基本的なことが分かっていなかった

結局、株仲間を解散しても物価は下がりず、商品価格や流通はますます混乱をきたしました

さらに、江戸・大坂周辺の土地を幕府直轄地へ組み入れようとした。

収穫高を見込める肥沃な土地が多かったといわれる

ところがこうした土地は諸大名の領地が複雑に入り組み、簡単にはいかない

「替え地」を準備することで不満を抑えようとした

替え地は年貢収入の少ない土地ばかりの指定になった

いくら財政再建といわれても納得のいく処置ではなかった

忠邦の「上知令」は諸大名や旗本の不満を爆発させ、忠邦は2年で罷免させられた

世のためになった政策

5代将軍綱吉、「生類憐みの令」

愚策とされたが、人道的な諸策と評価された

田沼意次の政策

わいろ政治家、悪徳大名と揶揄されるが、誰もしえなかった構造改革を進め

幕府が財政を悪化させた理由をコメ中心の農業主義だったと捉え、重商主義への転換を図り、

つまり、収益性の低い農業から同業者の株仲間の設立、特定商品の専売、外国との貿易拡大を優先させた

この政策が功を奏して幕府財政は好転し、社会インフラは整備されて、景気も上向いた

浅間山の噴火、天明の飢饉、嫡男意知刺殺

結果的には、意次は失脚

重商路線を推し進めれば近代国家へ脱皮したかもしれない

江戸幕府の経済政策に関する要点をまとめてみます。

1. ****貨幣改鑄の影響****: 幕府は直轄地や金銀の資源を持ちながら、財政が厳しくなった。特に第3代将軍・徳川家光の時代に金の枯渇や明暦の大火で財政が圧迫され、コメの税収も期待できなくなった。

2. ****荻原茂秀の改鑄****: 1695 年、茂秀は貨幣の純度を下げて改鑄を行い、幕府の財政を一時的に改善。流通量が増えたことで、インフレは起きなかった。これにより幕府は財政危機を脱した。

3. ****新井白石の逆改鑄****: しかし、白石が元禄小判の純度を元に戻す逆改鑄を行い、市場の貨幣が減少し、経済はデフレに陥った。これにより幕府の財政は再び厳しくなった。

4. ****吉宗の改革****: 享保の改革では、吉宗が質素儉約を進めたが、消費が落ち込み経済は悪化。上米の制でコメを集めたが、逆にコメ価格が下落し、幕臣の生活は困窮した。

7. ****田沼意次の改革****: 意次は重商主義を推進し、幕府の財政を改善。農業中心からの転換を図ったが、最終的には失脚した。

松平定信 寛政の改革

5. ****棄捐令****: 1789 年、幕府は借金を棒引きにする棄捐令を出したが、これにより幕臣の信用が失われ、経済はさらに悪化した。

6. ****水野忠邦の上知令****: 天保期の忠邦は極端な儉約令を出し、経済を停滞させた。株仲間の解散や直轄地の拡大を試みたが、不満を招き、彼は短期間で罷免される。

以上が江戸幕府の経済政策の概要です。幕府は様々な経済政策を試みましたが、時代の変化や内部の問題により、最終的には財政再建に失敗しました。

江戸幕府の経済政策をさらに詳しく時系列に沿って掘り下げます。

1. 幕府の経済状況の背景

江戸幕府は、初期には全国に 400 万石の直轄地を持ち、金山や銀山の資源を独占していました。また、長崎の朱印貿易を通じて莫大な富を得ていました。しかし、キリスト教の布教を恐れ、朱印船貿易から撤退し、財政基盤が脆弱化しました。

2. 荻原茂秀の貨幣改鑄（1695 年）

1695 年に荻原茂秀が実施した改鑄は、幕府にとって重要な転機でした。彼は、純度 86% の慶長小判を純度 57% の元禄小判に作り替え、流通量を 1.5 倍に増加させました。この結果、幕府の金庫には 500 万両が蓄えられ、短期的には財政が改善しました。彼の改鑄がインフレを引き起こさなかった理由は、貨幣流通の増加が必要に見合ったものであり、経済の安定を保ったからです。

3. 新井白石の逆改鑄（18 世紀初頭）

第 6 代将軍・家宣、第 7 代将軍・家継の側近として新井白石が登場しました。彼は、元禄小判の金含有量を慶長小判の水準に戻す逆改鑄を行い、市場の流通量が減少しました。この施策によってデフレが進行し、経済活動が停滞し、幕府は再び財政危機に直面しました。白石は儒学者であり、経済に関する知識が不足していたため、政策の失敗を招いたとされています。

4. 吉宗の享保の改革（18 世紀中頃）

第8代将軍・吉宗は享保の改革を推進しました。彼は、幕府の財政再建を目指し、質素儉約の方針を打ち出しました。儉約令を出し、武士階級や一般庶民に支出を抑えるよう求めましたが、消費者全体の購買意欲が低下し、物の流通が停滞しました。この影響で、経済は悪化し、物価は下落しました。

「上米の制」は吉宗の施策の一つで、諸藩に1万石ごとに100石の米を幕府に納めさせ、参勤交代の期間を短縮するというものでした。しかし、諸藩も財政が厳しく、米の集まった江戸では価格が下落し、幕臣や御家人の生活は困窮しました。結果的に、「上米の制」は失敗に終わり、幕府の経済政策に対する不満が高まりました。

松平定信の寛政の改革

5. 棄捐令（1789年）

1789年、幕府は「棄捐令」を発布しました。これは、5年前の借金をすべて無効にし、以後の借金の利子を3分の1に下げるというものでした。幕臣には歓迎されましたが、金を貸していた札差しには不満が広がり、信用が失われました。結果として、幕臣たちは借金がなくなったものの、金融面での信頼も失い、生活の困窮が続きました。

7. 田沼意次の改革（18世紀後半）

田沼意次は、幕府が財政を悪化させた原因を農業中心主義に見出し、重商主義に転換しようと思いました。特定商品の専売や外国との貿易拡大を進め、幕府の財政は改善しました。意次の政策は一時的に成功を収めました。彼の施策は次第に批判を浴び、最終的には失脚しました。

6. 水野忠邦の上知令（19世紀初頭）

天保の時代に、幕府は再び財政難に直面しました。水野忠邦が老中首座に就任し、彼は極端な倹約令を出しました。贅沢品の禁止や、庶民の娯楽を制限する施策も取られましたが、これにより消費はさらに落ち込み、経済は停滞しました。

忠邦は、江戸・大坂周辺の土地を幕府直轄地に組み込もうと試みましたが、これは大名の領地が複雑に絡み合っており、実現が困難でした。彼の「上知令」は大名や旗本の不満を引き起こし、2年で罷免される結果となりました。

まとめ

江戸幕府の経済政策は、さまざまな試みがなされたものの、時代の変化や内部の問題により、常に財政再建に苦しみました。特に貨幣政策の失敗や農業依存からの脱却ができず、幕府の信頼は徐々に損なわれていきました。これらの経済政策は、幕府の崩壊に向かう一因となったと言えるでしょう。

江戸幕府の行財政改革と経済政策

1. ****貨幣改鑄の影響****: 幕府は直轄地や金銀の資源を持ちながら、財政が厳しくなりました。特に第3代将軍・徳川家光の時代に金の枯渇や明暦の大火で財政が圧迫され、コメの税収も期待できなくなりました。

2. ****荻原茂秀の改鑄****: 1695年、茂秀は貨幣の純度を下げて改鑄を行い、幕府の財政を一時的に改善。流通量が増えたことで、インフレは起きなかった。これにより幕府は財政危機を脱した。

3. ****新井白石の逆改鑄****: しかし、白石が元禄小判の純度を元に戻す逆改鑄を行い、市場の貨幣が減少し、経済はデフレに陥った。これにより幕府の財政は再び厳しくなりました。

1. 正徳の治（1716年～1736年）

- ****背景****: 第6代将軍・徳川家宣の時代に実施され、家宣の側近である新井白石が主導しました。この時期は、幕府の財政が厳しく、経済の安定が求められていました。

- ****主要施策****:

- ****逆改鑄****: 元禄小判の金含有量を慶長小判の水準に戻す政策が行われましたが、これにより市場の貨幣流通量が減少し、経済はデフレに陥りました。

- ****儒学の普及****: 儒教に基づく文治政治が強調され、教育や学問が重視されました。
- ****評価****: 一時的に幕府の信頼を高めました。が、経済政策の失敗から財政は再び厳しくなり、幕府の信用が損なわれていきました。

2. 享保の改革（1716 年～1745 年）

- ****背景****: 第 8 代将軍・徳川吉宗の時代に実施され、幕府の財政再建が主な目的でした。
- ****主要施策****:
 - ****質素倹約令****: 武士や庶民に支出を抑えるよう求め、公共事業の削減が行われました。
 - ****上米の制****: 諸藩から米を集める政策が導入され、参勤交代を半減させることを目指しましたが、逆にコメ価格の下落を招きました。
 - ****新田開発****: 農業生産を増やすために新田開発が進められましたが、豊作による価格の下落が問題となりました。
 - ****評価****: 一時的には財政改善が見込まれましたが、倹約令による消費低迷や米価格の下落が経済を悪化させ、結果的には失敗に終わりました。

3. 寛政の改革（1787 年～1793 年）

- ****背景****: 第 11 代将軍・徳川家斉の時代に行われ、幕府財政の悪化や飢饉の影響を受けて実施されました。
- ****主要施策****:
 - ****棄捐令****: 借金の免除を行い、幕臣の経済的な救済を図りましたが、これにより金融面での信用が失われる結果になりました。
 - ****質素倹約の強化****: 贅沢品の禁止や公務員の支出抑制が進められました。
 - ****商業政策の見直し****: 株仲間の規制を強化し、農業中心の経済から商業への転換を図る努力がされました。

- ****評価****: 一時的に財政が改善されたものの、長期的には経済の停滞を招き、幕府の信頼は回復しませんでした。

4. 天保の改革（1841 年～1843 年）

- ****背景****: 第 11 代将軍・徳川家斉の後を受けた水野忠邦によって実施され、飢饉や経済の混乱が背景にありました。

- ****主要施策****:

- ****倹約令****: 極端な倹約令が出され、贅沢品や娯楽が禁止されました。

- ****株仲間の解散****: 物価の高騰を抑えるために、商業団体である株仲間を解散させましたが、これにより流通が混乱しました。

- ****上知令****: 幕府直轄地の拡大を図り、大名の領地を取り込もうとしましたが、これも不満を招きました。

- ****評価****: 経済政策は失敗し、忠邦は 2 年で罷免されました。改革は幕府の信用をさらに損なう結果となりました。

まとめ

正徳の治から天保の改革まで、江戸幕府は様々な経済政策を試みましたが、いずれも長期的な成功を収めることはできませんでした。これらの改革は、幕府の財政難や経済の混乱に対する対応として行われましたが、結果的には幕府の信頼を損なう要因となり、江戸幕府の崩壊へと繋がっていきました。

江戸幕府の経済政策と、正徳の治、享保の改革、寛政の改革、天保の改革を結びつけながら詳しく解説します。

幕府の経済政策の背景

江戸幕府は、初期には直轄地や金銀の資源を持ち、朱印貿易からの収入もありましたが、次第に経済は厳しくなりました。特に、金山や銀山の資源が枯渇し、明暦の大火の影響で財政が圧迫されます。このような背景の中で、幕府は様々な経済政策を試みました。

1. 正徳の治（1716 年～1736 年）

- **経済政策**:

- **逆改鑄**: 新井白石が主導し、元禄小判の金含有量を慶長小判の水準に戻す改鑄を行いました。これにより貨幣の流通量が減少し、デフレが進行しました。

- **文治政治の強化**: 儒教を基にした教育や学問の普及が図られましたが、経済政策に対する知識は不足していました。

- **評価**: 一時的には幕府の信用が高まりましたが、経済政策の失敗により財政は再び厳しくなり、信頼が損なわれました。

2. 享保の改革（1716 年～1745 年）

- **経済政策**:

- **質素儉約令**: 武士や庶民に支出を抑えるよう求め、経済の健全化を図りました。しかし、消費低迷が物の流通を停滞させました。

- **上米の制**: 諸藩から米を集め、参勤交代の期間を短縮する政策が導入されましたが、逆に米価格が下落し、幕臣の生活が困窮しました。

- **新田開発**: 農業生産を増やすために新田開発が進められましたが、豊作による価格の下落が経済を圧迫しました。

- ****評価****: 一時的には財政改善が見込まれましたが、倹約令による消費低迷と米価格の下落が重なり、経済悪化が進みました。

田沼意次の幕政改革

浅間山の噴火、天明の大飢饉

3. 寛政の改革（1787 年～1793 年）

- ****経済政策****:

- ****棄捐令****: 幕臣の借金を免除し、経済的救済を図りましたが、金融面での信用が失われました。

- ****質素倹約の強化****: 贅沢品の禁止や公務員の支出抑制が進められましたが、消費が減少し、経済は停滞しました。

- ****商業政策の見直し****: 株仲間の規制を強化し、農業中心の経済から商業への転換を図る努力がされましたが、効果は限定的でした。

- ****評価****: 財政が一時的には改善されたものの、長期的には経済の停滞を招き、幕府の信頼は回復しませんでした。

4. 天保の改革（1841 年～1843 年）

- ****経済政策****:

- ****倭約令****: 極端な倭約令が出され、贅沢品や娯楽が禁止され、庶民の楽しみが奪われました。経済の活力が失われました。

- ****株仲間の解散****: 物価の高騰を抑えるために商業団体を解散しましたが、流通が混乱し、経済はさらに悪化しました。

- ****上知令****: 幕府直轄地の拡大を図り、大名の領地を取り込もうとしましたが、これも不満を招き、反発を引き起こしました。

- ****評価****: 経済政策は失敗に終わり、忠邦は短期間で罷免されました。これにより、幕府の信用がさらに損なわれました。

まとめ

江戸幕府の経済政策は、時代ごとの改革と密接に関連しています。正徳の治では財政の安定を図ろうとしましたが、逆にデフレを招きました。享保の改革では質素倭約を進めたものの、経済は停滞。寛政の改革では借金免除の施策が行われましたが、信用を失い、天保の改革では極端な倭約令が経済をさらに悪化させました。

各時代の改革は、幕府の経済政策の失敗や内部の問題を反映しており、最終的には幕府の信頼を損なう要因となり、江戸幕府の崩壊へと繋がっていきました。これらの経済政策の教訓は、時代を超えて現代の政策にも影響を与えています。

江戸幕府は財政難と経済の混乱に対応するため、数度にわたる行財政改革を実施しました。

1. 正徳の治（1716 年～1736 年）

- 幕府財政の立て直しを図り、新井白石が主導。貨幣の改鑄でデフレを招き、一時的に信頼を得たものの、再び財政難となりました。

2. 享保の改革（1716 年～1745 年）

- 吉宗による財政再建策。質素儉約令や上米の制、新田開発を進めましたが、消費低迷やコメ価格下落で経済は悪化しました。

3. 寛政の改革（1787 年～1793 年）

- 借金免除や儉約強化などで一時的に財政を改善。しかし消費減退や信用失墜により経済停滞が進みました。

4. 天保の改革（1841 年～1843 年）

- 忠邦が極端な儉約令、株仲間の解散、上知令などを実施。流通混乱や反発を招き、政策は短期間で終了しました。

まとめ

各改革はいずれも長期的な成果は出せず、結果的に幕府の信頼を損ない、その崩壊につながりました。この経験は現代の政策にも示唆を与えています。

江戸幕府の経済政策と行財政

正徳の治・享保の改革・寛政の改革・天保の改革を中心として

はじめに

江戸幕府は約 260 年以上にわたり日本を統治しましたが、その長い歴史の中でたびたび財政危機や経済的混乱に直面しました。幕府はこうした課題に対し、時代ごとにさまざまな経済政策や行財政改革を実施し、安定と再建を図ろうとしました。本稿では、特に「正徳の治」「享保の改革」「寛政の改革」「天保の改革」という四つの改革期を中心に、幕府の経済政策の展開とその成果・限界について詳しく解説し、現代の政策への教訓も考察します。

幕府の経済政策の背景

江戸幕府成立当初は、大名や幕府直轄地からの年貢収入、金銀山の採掘、朱印船貿易による利益などが財源となり、比較的安定した財政運営が可能でした。しかし、時が経つにつれて金銀山の資源枯渇や、度重なる災害（明暦の大火など）による支出増、人口増加に伴う社会構造の変化が生じ、次第に財政は困難を極めるようになっていきます。こうした状況下で、幕府は各時代の将軍や老中の主導による改革を断行していきました。

1. 正徳の治（1716 年～1736 年）

背景

正徳の治は、第 6 代将軍・徳川家宣の時代、新井白石を中心とした文治主義的な政策として始まりました。当時、貨幣の改鑄や財政再建が急務となっていました。

主要施策

- 逆改鑄：元禄小判の金含有量が極端に下げられていたため、これを慶長小判の水準に戻す政策が行われた。しかし、この結果市場の貨幣流通量が大幅に減少し、

デフレ（物価下落）が進行しました。これにより一時的に信頼を得たものの、経済活動は停滞し、再び財政難が深刻化しました。

- 儒学の普及：新井白石は儒教に基づく文治政治を推進し、教育や学問の普及を重視しました。官僚や大名に対しても儒学的な倫理観を求める姿勢が強調されました。

評価

一時的には幕府への信頼が高まりましたが、経済政策の知識不足から財政は再び厳しくなり、幕府の信用は徐々に損なわれていきました。特に、貨幣流通量の減少による経済への悪影響は大きく、長期的な成果は得られませんでした。

2. 享保の改革（1716 年～1745 年）

背景

享保の改革は、第 8 代将軍・徳川吉宗が幕府財政の再建を目的として断行した一連の改革です。吉宗は「米将軍」と称されるほど、米を中心とした政策を展開しました。

主要施策

- 質素儉約令：武士や庶民に対して消費を控えるよう求め、生活の質素化を促しました。これに伴い、公共事業の削減なども進められましたが、消費低迷が物資流通を停滞させました。
- 上米の制：諸藩に対して米を献納させることで幕府の財源確保を狙い、参勤交代の期間短縮と引き換えに米の供出を要求しました。しかし、この政策は逆に米価の下落を招き、幕臣の生活困窮を招いてしまいました。
- 新田開発：農業生産を増やす新田開発を推進しましたが、豊作による米価の下落が起こり、経済全体への負担となりました。

評価

一時的には財政の改善が見込まれましたが、質素儉約令による消費低迷や米価の下落が重なり、経済は逆に悪化しました。改革自体は幕府の経済基盤強化を意図していましたが、結果として経済停滞を招き、長期的な成功には至りませんでした。

3. 寛政の改革（1787 年～1793 年）

背景

寛政の改革は、第 11 代将軍・徳川家斉の時代、幕府財政の悪化や天明の大飢饉などの影響を受けて、老中松平定信によって実施されました。

主要施策

- 棄捐令：幕臣の借金を免除し、経済的救済を図りました。しかし、金融面での信用が失われ、商人や金融業者の経済活動が停滞する結果となりました。
- 質素儉約の強化：贅沢品の禁止や官僚の支出抑制などが進められ、全般的な消費が減少しました。
- 商業政策の見直し：商業組合（株仲間）の規制を強化し、農業中心の経済から商業への転換を図る努力がなされましたが、成果は限定的でした。

評価

一時的には財政改善が図られましたが、消費減退や信用失墜により経済は停滞し、幕府の信頼は回復しませんでした。長期的には経済の活力が損なわれ、幕府崩壊への流れを加速させることとなりました。

4. 天保の改革（1841 年～1843 年）

背景

天保の改革は、水野忠邦が飢饉や経済混乱を背景に断行したもので、極端な儉約政策と商業制度の改変が特徴的でした。

主要施策

- 儉約令：贅沢品や娯楽の禁止、生活の徹底的な質素化を求める政策が実施され、庶民の楽しみが奪われました。消費活動が大きく減退し、経済の活力が失われました。
- 株仲間の解散：物価高騰抑制を目的に商業団体である株仲間を解散しましたが、流通の混乱が生じ、商取引が停滞しました。
- 上知令：幕府直轄地の拡大を図り、大名の領地を取り込もうとする政策が行われましたが、各藩の反発を招き、行政上の混乱が生じました。

評価

経済政策は失敗し、忠邦自身も短期間で罷免されました。政策自体も庶民の不満を高め、幕府の信頼をさらに損なう要因となりました。

その他の改革と関連する経済政策

田沼意次による積極的な商業政策や貨幣流通策、浅間山の噴火や天明の大飢饉など自然災害の影響も、幕府の経済政策と密接に関連しています。田沼時代には重商主義的な政策が一部進められましたが、賄賂や利権の横行が信頼失墜を招き、飢饉時には政策の限界が露呈しました。

まとめと現代への教訓

正徳の治から天保の改革まで、江戸幕府は度重なる財政危機に対し、さまざまな行財政改革と経済政策を試みました。しかし、いずれの改革も短期的な成果はあれど、長期的な経済活性化や財政安定にはつながらず、むしろ消費の低迷や流通の混乱、信用の失墜など、経済の停滞を加速させる結果となりました。これらの失敗は、幕府の統治体制そのものの信頼を損ない、最終的には江戸幕府の崩壊へと繋がったのです。

現代においても、経済政策はその時代の社会構造や消費者心理を十分に踏まえる必要があります。過度な儉約や流通制度の変更は、経済全体の活力を損なうリスクがあること、そして財政基盤の安定には多角的な視点と柔軟な対応が不可欠であることを、江戸幕府の経験は示唆しています。歴史から学び、失敗を繰り返さない政策運営が、安定した社会の実現につながるでしょう。

直轄領からのコメの税収を期待したが、全国規模の新田開発を進め、豊作によりコメの価格が下がり、期待した税収収入にはならなかった。

経費は増大、年々収入は減衰、財政は逼迫した。

荻原茂秀、1695 年、元禄 8 年、純度 86%の慶長小判を純度 57%の元禄小判に作り替える 2/3 の改鑄を断行、および交換レートを 1 対 1 とした。

よって、貨幣流通量は 1・5 倍となった

増えた分は幕府の金蔵に入り、幕府の財政は瞬く間に改善し、

500 万両の資産を得ることとなった。

通貨発行益とデフレからの脱却によって、幕府は財政破綻の危機から脱することができた。

大量の貨幣を市場に流通させると急激なインフレを招くが、重秀の貨幣改鑄はそうはならず、商品価格は乱高下せず、庶民の生活もさして影響を与えず、むしろ経済を安定させた。

重秀は、幕府に信用がある限り、幕府の発行する通貨も保証されることを見抜いていた。